

「ヨナのしるし」

ルカの福音書 11:29～32

はじめに

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:16 また、ほかの者たちはイエスを試みようとして、天からのしるしを要求した。

今日の内容は前回のこの一節に対するイエシュアの返答として記されているものです。人々はイエシュアに「天からのしるしを要求した」とあります。そもそもこの「しるし」とは一体どういう意味のものを指すのでしょうか。ヘブル語から見てみましょう。「しるし」を意味するヘブル語のオート(תִּיָא)の初出箇所は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

1:14 神は仰せられた。「光る物が天の大空にあれ。昼と夜を分けよ。定められた時々のため、日と年のためのしるしとなれ。

1:16 神は二つの大きな光る物を造られた。

これは天地創造の第四日についての記述ですが、ここに聖書で最初の「しるし」オートが使われています。そしてそれは本来、「大空にあれ。昼と夜を分けよ」とあるように、大空、空中にあって昼と夜を、光と闇を分ける、すなわち神のものとそうでないものとを分ける、区別する、裁くことを目的としたものであることが解ります。これが実際に起こる出来事は以下の預言の成就です。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

やがて私たち教会は「キリストにある死者」となって眠るならば「よみがえ」らされます。それはつまり死から分けられて主とともに生きるものとなる、まさに死からいのち、永遠のいのちへ、すなわち闇から分けられて光へと移されます。またもしその日「生き残っている」ならば「悪い時代」であるこの世、この地から同じく分けられて天へと移されます。それらがいずれも一緒に「空中」で行われます。そしてこれを「主ご自身」すなわちイエシュアご自身が行われます。このような神のご計画が、これを成就されるイエシュアの働きが秘められた、指し示された言葉がこの「大空において分ける」ものとしての「しるし」オートなのです。

また「**しるし**」オートは「**定められた時**」をもたらすためのものでもあるとも記されています。この「**定められた時**」と訳されているモーエード(**מועד**)は「集会、祭り」とも訳され、主がイスラエルに対して命じられた各種の例祭（過越し、種なしパン、七週、仮庵など）および安息日（年）を指し示す言葉で、それは全イスラエルが主に立ち返り、主の御前に集まること、集められることを意味するものなのです。やがてイエシュアはイスラエルの王なるメシアとして地上に再臨され、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫であるイスラエル十二部族をみな集められます。そしてこれを祝福し「神の国」としてのイスラエル王国を再興、再建されます。「わたしは…**定めた時に**、あなたのところに戻って来る（創18:14）」とあるように、モーエードには主がイスラエルの民を祝福し、これを大いに栄えさせるために彼らのところに再び戻って来られることが指し示された言葉であり、それを成就される御方がオート「**しるし**」としてのイスラエルの王なるメシア、イエシュアであることもまた奥義としてこのオートという言葉には秘められているのです。

このようにオート「**しるし**」とは本来、主がお選びになった者たち、すなわちイスラエルと教会を主イエシュアの御前に、そのみもとに集めることを意味する言葉であり、具体的にはイエシュアによる「携拳と再臨」の二つのご計画の成就を指し示すものであるということです。それを指し示すかのように、先ほどのオートの初出箇所において、神はしるしとして「**二つ**の大きな光る物を造られた（創1:16）。」とあり、初めからしるしが二つあることを暗示しておられます。ですからここでイエシュアが挙げておられる「**ヨナのしるし**」もまた二つのものが存在するということです。

1. 二つのしるし

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:29 さて、群衆の数が増えてくると、イエスは話し始められた。「この時代は悪い時代です。しるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし、ヨナのしるしは別です。」

11:30 ヨナが二ネベの人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。

「**ヨナのしるし**」これを知るためにはやはり彼についての物語を見なければなりません。

ヨナ書【新改訳 2017】

1:1 アミタイの子ヨナに、次のような主のことばがあった。

1:2 「立ってあの大きな都二ネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。」

1:3 しかし、ヨナは立って、主の御顔を避けてタルシシュへ逃れようとした。彼はヤッフアに下り、タルシシュ行きの船を見つけると、船賃を払ってそれに乗り込み、主の御顔を避けて、人々と一緒にタルシシュへ行こうとした。

1:4 ところが、主が大風を海に吹きつけられたので、激しい暴風が海に起こった。それで船は難破しそうになった。

1:15 …彼らはヨナを抱え上げ、海に投げ込んだ。すると激しい怒りがやんで、海は凪になった。

1:17 主は大きな魚を備えて、ヨナを呑み込ませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた。

2:1 ヨナは魚の腹の中から、自分の神、主に祈った。

2:2 「苦しみの中から、私は主に叫びました。すると主は、私に答えてくださいました。よみの腹から私が叫び求めると、あなたは私の声を聞いてくださいました。

2:4 私は言いました。『私は御目の前から追われました。ただ、もう一度、私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです。』

2:7 私のたましいが私のうちで衰え果てたとき、私は主を思い出しました。私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。

2:8 空しい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨て去ります。

2:9 しかし私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえを献げ、私の誓いを果たします。救いは主のものです。」

2:10 主は魚に命じて、ヨナを陸地に吐き出させた。

ヨナは主に選ばれた預言者でしたが、使命に逆らい主の怒りを引き起こし、その結果「**激しい暴風**」さらには「**魚の腹の中**」たとえて「**よみの腹**」という最悪の状況に見舞われました。そのどん底の中で彼はこう預言しました「**ただ、もう一度、私はあなたの聖なる宮を仰ぎ見たいのです**」と。そして「**私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえを献げ、私の誓いを果たします**」と、なんと彼は主の幕屋、神殿での礼拝を慕って祈り、叫んだのです。そして主はこの祈りを聞かれ、「**陸地**」乾いた地へと彼を救い、導き出されました。主に選ばれ、逆らい、苦難に会い、悔い改めて救い出される、というこのパターン、これはイスラエルの民の「型」であり彼らの歴史、歩み、そして彼らに定められた神のご計画そのものです。かつて幾度となくこの「型」は表され、イスラエルが救い出されてきたことは旧約聖書を見ればそれは明らかです。そして世の終わりには「型」としてではなくついにその本体としてそれは成就します。黙示録の獣、反キリストの出現によって始まる大患難時代、その激しい迫害と虐殺の中でイスラエルの残りの者たちは預言者ゼカリヤが記した「**恵みと嘆願の霊**（ゼカリヤ 12:10）」を注がれ、その現れである「**二人の証人**（黙 11:3）」によってイエシュアこそがメシアであることに目が開け、主に栄光を帰す者へと変えられ、その御名を呼び求めるようになります。そしてそれに呼応してイエシュアは天の軍勢を率いて地上再臨され、イスラエルに永遠の救いと勝利を、この地に「**神の国**」をもたらされ、ヨナが預言的に慕い求めた「**聖なる宮**」における礼拝は、エルサレムの神殿が建て直されることで成就します。ちなみにヨナは「**三日三晩、魚の腹の中にいた**」とありますが、これはマタイ 12:40 の並行記事が示すようにイエシュアの十字架の死を指し示しますが、それもまた終わりの日に起こることの「型」なのです。すなわちヨナの「**三日三晩**」もイエシュアの十字架のそれも、どちらもエルサレムの神殿が三つの日において破壊される、つまり三度建てられ、三度失われることを指し示しているのです。すでにそれは二度破壊され、今日も失われたままですが、やがてまさに終わりの日の「**しるし**」としてエルサレムに第三の神殿が建てられ、そして獣、反キリストによってこれは奪われ、失われます。そし

てこれを奪い返し、獣とその国々を滅ぼし、イスラエルを救うためにイエシュアは再臨されるのです。このようなことがやがて起こるといふ神のご計画を指し示すもの、それが「ヨナのしるし」の、その第一の意味であり、それは世の終わりの大患難の中で起こされる「イスラエルの残りの者」と呼ばれるユダヤ人たち、およびエルサレムの神殿を指し示しているのです。

そして「ヨナのしるし」の第二の意味は、正確にはヨナによって起こった「二ネベのしるし」とも言えるものです。こう記されています。

ヨナ書【新改訳 2017】

3:4 ヨナはその都に入って、まず一日分の道のりを歩き回って叫んだ。「あと四十日すると、二ネベは滅びる。」

3:5 すると、二ネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで粗布をまとった。

3:6 このことが二ネベの王の耳に入ると、彼は王座から立ち上がって、王服を脱ぎ捨てて粗布をまとい、灰の上に座った。

3:10 神は彼らの行いを、すなわち、彼らが悪の道から立ち返ったのをご覧になった。そして神は彼らに下すと言ったわざわいを思い直し、それを行われなかった。

このように、ヨナの預言によって「神を信じ」「悪の道から立ち返った」二ネベの民たちの姿が記されており、これが「ヨナのしるし」が指し示す第二の「型」です。大患難の中で起こされるイスラエルの残りの者たちはイエシュアこそが神の御子メシアであることに目が開け、その御名を呼び、また同時にそれを宣べ伝える者となります。その声、言葉に耳を傾け、同じくイエシュアを信じるようになる異邦人たちの姿がここには指し示されているのです。ちなみに「二ネベ(נִינְוֵי)」とは「子孫」を意味するニーン(נִי)と「ほめたたえる」という意味のナーヴァー(נָוָה)が組み合わさった言葉で「主をほめたたえる子孫」という意味をもった名前なのです。ヨハネの黙示録 7 章には、イスラエルの残りの者としての 144,000 人のイスラエルの民に続いて、大勢の異邦人たちについての預言がありますが、その中で彼らはまさに主をほめたたえる国民として言及されています。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

7:4 私は、印を押された者たちの数を耳にした。それは十四万四千人で、イスラエルの子らのあらゆる部族の者が印を押されていた。

7:9 その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

7:10 彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

7:14 …「この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

世の終わりの「大きな患難を経て」イスラエルの残りの者によってイエシュアを信じ、主をほめたたえる者とされる大勢の異邦人の国民、彼らもまた私たち教会と同様に地上から分かつたれ、天に上げられ、

イエシュアの御座の前に集められています。それが「ヨナのしるし」が指し示す第二の意味であり、御座の子羊であられるイエシュアの「子羊の血」によって成し遂げられる神のご計画です。

このように、「ヨナのしるし」とは、世の終わりの大患難の中で起こされる 144,000 人のイスラエルの残りの者と、彼ら働きによって主を信じるようになる大勢の国民、異邦人についての神のご計画を指し示すものなのです。ちなみにこの「ヨナ(נֹחַ)」という名前は「鳩」という意味ですが、その中にヤーナー(נָאָר)「しいたげる、圧迫する」という意味の言葉が隠されています。この初出箇所を見てください。

出エジプト記【新改訳 2017】

22:21 寄留者を苦しめてはならない。虐げてはならない。あなたがたもエジプトの地で寄留の民だったからである。

これは主がイスラエルに対し、彼らの中に住む寄留者すなわち在留異邦人への扱いについて教えられたものです。ここに「虐げてはならない」という意味で聖書で最初のヤーナーが使われており、イスラエルと異邦人が争わず、平和を保ちつつともに住む、ともに生きることを主は命じておられます。

民数記【新改訳 2017】

15:15 一つの集会として、掟はあなたがたにも、寄留している者にも同一であり、代々にわたる永遠の掟である。主の前には、あなたがたも寄留者も同じである。

とあるとおりです。このように「ヨナのしるし」とは、神であられる主イエシュアのみもとでイスラエルと異邦人が一つなるとともに住む、ともに生きるようになるという神のご計画の完成である「神の国」民を指し示したものであるということです。神のご計画はイスラエルだけを祝福するものではなく、イスラエルにつながるすべての異邦人を同じように祝福することなのです。

2. まさるもの

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:31 南の女王が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります。

11:32 ニネベの人々が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし見なさい。ここにヨナにまさるものがあります。

「この時代」すなわち「悪い時代」の中にあつた「南の女王」が「ソロモン」に聞くため、神の御言葉から遠く離れていた「地の果てから来た」ように、また同じく「ニネベの人々」が「ヨナ」に聞き従

って悪の道から立ち返り、救いを得たことが並べて示されていますが、「[しかし見なさい](#)」とあるように、注目すべきはそれらに「[まさるもの](#)」であるイエシュアご自身によって多くの異邦人がこの御方を信じて「[さばきのとき](#)」に救われることなのです。使徒パウロがこう説いています。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

15:9 また異邦人もあわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです。「それゆえ、私は異邦人の間であなたをほめたたえます。あなたの御名をほめ歌います」と書いてあるとおりです。

15:10 また、こう言われています。「異邦人よ、主の民とともに喜べ。」

15:11 さらに、こうあります。「すべての異邦人よ、主をほめよ。すべての国民が、主をたたえるように。」

15:12 さらにまたイザヤは、「エッセイの根が起る。異邦人を治めるために立ち上がる方が。異邦人はこの方に望みを置く」と言っています。

アブラハムの子孫、イスラエルをお選びになった神ですが、神は決して異邦人を見離しておられるわけではありません。主はイスラエルの主であられるだけでなく、異邦人の主でもあられ、すべてのものを治められる主であられるのです。その主であられるイエシュアを、ただこの御方だけを、ソロモンよりもヨナよりもまさる、すべてにまさるイエシュアの御名、この御名だけをすべての国民はあがめなければならず、やがて必ずそのようになることがまさに「[ここに…あります](#)」と、強調されて指し示されているのです。ちなみにイエシュアはご自分を指して「[まさるもの](#)」と言われましたが、ここに使われているガードール([גִּדְוֹל](#))は本来、冒頭で述べた創世記 1:16 にその初出があるのです。

創世記【新改訳 2017】

1:14 神は仰せられた。「光る物が天の大空にあれ。昼と夜を分けよ。定められた時々のため、日と年のためのしるしとなれ。

1:16 神は二つの[大きな](#)光る物を造られた。

イスラエルと異邦人、この二つを救うためのガードール「偉大な」神のご計画、主イエシュアによってそれらはみな成し遂げられます。この光を見つめ、この光に照らされ、歩んでまいりましょう。というわけで今回は「光」についての話へと続いていきます。